

「多宗教共存」ニホンに学べ 欧州の神学生 京で研修中



吉田神社で神道の教えについて説明を受けるヨーロッパの研修生（京都市左京区）

異宗教の信仰を肌で感じようと、欧州の神学生が京都で神道や仏教を学んでいる。伝統的キリスト教社会だった西欧諸国でもイスラム教信者らが増えるなか、ドイツの宣教団体の呼びかけで中東のレバノンと日本で始まった研修プログラムの一環。日本での実施団体は「多宗教が共存する日本で何かを学ぼうとする意欲は強い」と成果を期待している。

「日本の諸宗教－研修と対話プログラム」は京都市上京区の日本キリスト教協議会（NCC）宗教研究所が主催する。ドイツのプロテスタント諸派がつくる宣教団体の要請で、4年前に始まった。

ドイツでは「住民のほぼすべてがキリスト教徒だった昔と違い、どの都市にもイスラム教やヒンズー教の寺院が増えた。圧倒的に優位だったキリスト教会も意識変革を迫られている」（研究所）という。今期はドイツの神学生シモン・パッシェンさん(25)とコンスタンティン・プラウルさん(24)、ノルウェーの教師カイ・オールセンさん(31)の3人が参加している。

10月から約半年間、京都に滞在し、神道や仏教の教義などの講義を受け、社寺を訪ねて対話交流を図る。日本では少数派のキリスト教の現状、創価学会や天理教など新宗教の布教の様子も学ぶという。

吉田神社（左京区）であった実地研修では、社殿や神木の意味を説明する神職に、研修生が「神木とほかの木はどこが違うのか」「神道にも終末思想はあるか」などと尋ねた。シモンさんは「移民が増えてドイツでも他宗教との出会いは増えている。互いのアイデンティティを大切にしながら、共存している日本の状況から学ぶことができれば」話した。

講師には浄土宗や浄土真宗の僧侶も協力する。幸日出男・前研究所長は「諸宗教交流を学ぶのに京都はうってつけだ。これまでは西洋の教会から吸収するばかりだったが、こういった発信の機会を増やしたい」と期待する。

（京都新聞） - 11月29日 15時16分更新